

Title	庄司吉之助著 米騒動の研究
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.12 (1957. 12) ,p.1198(100)- 1201(103)
JaLC DOI	10.14991/001.19571201-0100
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19571201-0100">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19571201-0100</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

能性はあつたのだが彼はあえて師マイツェンのおかげにかくれた為ロ  
ストフツェフが注目されることになつたのである。然しカルヴィニ  
ズム資本主義のテーゼは大さわぎを起した。ここでは普通のアメ  
リカ人にはあたりまえの資本主義をウェーバーはその客観性にも拘  
わらず最内奥では厄介な運命と感じているとみられ、又アメリカ人  
は資本主義をデモクラシーと同義とみ官僚制と対立するものと感じ  
るが故に、官僚主義化のもたらす危険に警告を発するウェーバーを  
悲観論者とみなす意見が容易に生じたのである。

(2)「ウェーバー受容の主役者達の特性」 論議の一部は Social  
Research で行われたがこの雑誌は New School of Social Re-  
search の会員により主として執筆され刊行されており、会員の大部  
分はドイツ的な学問的思考を郷里とする亡命者達である。ベッカー  
とパースンズは生まれながらのアメリカ人ではあるがウェーバー的  
伝統の濃く存するハイデルベルクとケルンで学んだ人である。いず  
れにせよここにあげられた人や先にのべられた人々は最初にあげた  
アメリカ社会学の伝統と少しもつながっていない人々であり、それ  
に対応して何か新たなものを感じさせる人々なのである。たとえば  
パースンズのアメリカ社会学会会長の選任は「理論家」の承認とみ  
なされ、このことはまたウェーバーのアメリカ参入の間接的な容易  
化を意味する。形而上的歴史の体系と統計学の結びつきをもち、そ  
の全体性形而上学に保守的の社会層に関心をもったソローキンの場合  
とは事情が異なるのである。そのほか体系と方法論を求めつつある

アメリカ人はこの間にジムメル、ゾムバルト、テニス、トレルチ、  
フォン・ウィーゼ等の体系を翻訳を通じて知る機会をますますもつ  
にいたり、このことはソローキンの影響を、従つて彼のウェーバー  
批判の意義を減少せしめた。さて最後にウェーバーうけ入れ過程内  
でのドイツ亡命者の特殊な機能に関する問題があるが、これは反ヒ  
トラリー亡命者層の社会学という、より包括的な領域にぞくする重要  
な課題であるといえこの論文の領域外にある。（石坂 慶）

庄司吉之助著

### 『米騒動の研究』

日本の近代史にかんする研究が、今日ほど盛んな時期は今までに  
なかつたであろう。いわゆる「昭和史」をめぐるおこなわれた論  
争などをみても、現代史への関心が、今日ほど学生や知識人あるい  
はまた一般の人々の間にたかまつた時はなかつたろうし、それだけ  
にまた偏見によって歪められていない正しい歴史を書くことは、き  
わめて困難なことである。それにしても日本の近代史、とりわけ明  
治維新以後から今日までの約百年間にわたる日本の歴史には、充分  
明らかになされていないことが多くことだらうか。国家権力の不  
当な圧迫によって、わが国の歴史の研究がどんなに歪められたかは、  
今更ここにいふまでもないが、最近、多くの研究者たちによって、

すぐれた研究が精力的につづけられていることは、まことに喜ばし  
い限りである。いまここにとりあげた庄司吉之助氏の『米騒動の研  
究』も、このいわば「ゆがめられた歴史」にたいするひとつの挑戦  
であり、きわめて実践的な意図のもとにまとめられた注目すべき作  
である。庄司氏は本書の序文において、米騒動の階級闘争的意義  
をつぎのように強調される。

「米騒動は私自身忘れられない事件であるが、むしろ、全国の労  
働者・農民、更に資本家・地主・米商等にとつて忘れられてはなら  
ない事件である。何故ならば大正七年当時は、いうまでもなく資本  
家が日本資本主義発達の波に乗り、資本の『競争』を熾烈ならしめ、  
又、労働者を低賃金で抑圧し、地主は小作人からギリギリの線まで  
収奪し、米商は農民から農産物の買叩きで利潤を吸収する等、地主  
と資本家との本体をむき出しにした時期であるからであり、更に労  
働者（市民）・漁民・農民はこのような資本の攻勢に階級として対抗  
し、全国的に起ちあがった時であるからであり、又その階級闘争の  
血が今日に脈々と引きつがれているからである」と。筆者は日本資  
本主義発達史にかんしてはまったく、素人にすぎないし、従つて米  
騒動が、日本資本主義の構造や発達とどのような関連にあるか、こ  
の点について云々する資格はまったくない。しかしながら、労働運  
動史を研究する者のひとりとして、この書を紹介批評を通じて米騒  
動と労働運動との関係についてふれてみたいと考えるものである。  
その前に本書の内容についてふれると、まず本書は、第一部 日

本資本主義の発達と米騒動、第二部 福島県における米騒動の経済  
的・社会的背景とその闘争形態、に大別されるが、第一部において  
は、第一節 日本の資本主義発達の様相、第二節 階級闘争の産業  
別形態、第三節 米騒動の全国的展開、そしてさらに片山潜の「日  
本における一九一八年の米騒動」という一九三三年に発表された論  
文をはじめとして、漁村および都市における米騒動にかんする資料  
がふくまれている。

第二部においては、著者庄司氏の故郷である福島県における米騒  
動の勃発を、その社会的経済的背景のなから把握しようとする努  
力が、はつきりとうかがうことができる。すなわち、第一節 地方  
における資本主義の発達状態、第二節 寄生地主制と資本の存在形  
態、第三節 都市労働者と農村労働者の状態、第四節 米騒動の経  
済的社会的背景、第五節 米騒動発生と闘争の産業別形態、史料・  
若松の騒動、そして要約がふくまれている。

本書についていふことのできる特徴的な事実、いたるところに  
統計や資料が豊富にかかげられ、読者の便をはかっていることであ  
ろう。とくに日本の資本主義発達の道標ともいふべき株式会社発  
達を、会社数、払込資本、労働者数などの点から詳細に分析し、ま  
た労働者については、職種別に分類してそのおのおのパーセンテ  
ージをあげ、さらに米騒動が勃発した大正七年を中心として、(一)資  
本の集中傾向、(二)農民層の分解の傾向、(三)労働運動の激化という三  
点に焦点をしばりながら、米騒動勃発の必然性を、社会的経済的な

背景の面から把握しておられる。統計的な資料を駆使しつつ、日本資本主義の状況を分析した労作は必ずしも少なくないが、本書のように、米騒動という革命的な一大事件の徹底的究明のためになされた研究は少ない。この意味で、本書は、日本資本主義の一断面を主題としたユニークな研究であるということができよう。

米騒動と呼ばれるこの革命的な大事件は、大正七年八月三日富山県中新川郡水橋村の漁業女房連の米の船積阻止と米備値下要求に端を発したものであり、それから約一ヵ月遼原の火のように全国にひろがったものであった(三五頁)。闘争がもっともはげしかったのは、八月十四日から十七日までの四日間で、その範囲は三府二十三県におよび、これに参加した人員総数は三十五万七千七百七十人にのぼったといわれる。また片山潜は、その論文「日本における一九一八年の米騒動」のなかで、米騒動の革命的な意義を強調して、つぎのようにいっている。「米騒動について語ることは、人民革命のために、今、英雄的に闘っている日本労働者の革命的行動について語ることだ。日本の労働階級は、米騒動でおそろしい犠牲を蒙った。一九一八年のこの運動は、日本プロレタリアートの初めての闘争的大衆行動であり、日本の搾取階級をひじょうにふるえ上らせた」と。米騒動が人民大衆による革命的行動であったという事実は、それがすでに農民労働者としてその他の一般庶民をふくむ大規模な闘争であったことからも否定出来ないが、しかしもっとも見逃し得ない重要な点は、かくも大規模にしかもかくも広範囲にわたって、革命的な運動

にまで昂められたこの一大闘争が、何故にわずか一ヵ月余りのうちに鎮められてしまったか、その革命的なエネルギーが、何故組織化されなかったか、ここにあるのではないかと思う。

いうまでもなく、米騒動の発端は、第一次世界大戦の結果として、人民大衆の生活水準の低下、とくに米価の暴騰にともなう漁民、農民および労働者大衆の窮乏化がおこり、彼等はこれにたいして大きな不満をいだくとともに、他方これに乗じて私腹を肥やす悪徳商人にたいするはげしい憎しみがこりかたまって、突発的に騒動がおこったのだといわれている。もちろん、こうした大衆的革命的な行動がおこなわれるためには、たとえばロシア革命の影響などを無視することはできない。しかしそれにもかかわらず、注目しなければならぬことは、この騒ぎが、誰はじめるともなくきわめて自然発生的におこったことである。人民大衆のやる方ない不満が、たまたま、あるきっかけをつかんで全国的なものに発展したということ、従ってそこには特定の指導者もなく、その背後には特別の組織も、更にまた統一的思想も見られなかったことである。米騒動が、運動とはいわれず騒動と呼ばれる理由はここにある。

われわれはもちろん、米騒動の革命的な意義を強調する点では、これをいくら強調してもしすぎることはないと思ふ。但しこの場合、ひとつの条件が顧慮されなければならないのではないだろうか。人民大衆の革命的なエネルギーが、ひとたびその契機をつかめば、どれほど偉大なものとなるか、そのもっとも輝かしい例証を米騒動

はたしかにわれわれにあたえてくれる。しかしながらこれを逆にいえば、どんなに偉大な革命的な昂揚もよりよく組織され、革命的な理論を身につけたすぐれた指導者によって、その闘争がみちびかれるのでなければ、所詮それは暴動としてしか結果しないにちがいない。一見、無気力に見える一般大衆のなかに眠るエネルギー、これは正しく評価しなければならぬ。米騒動は、はからずも、この巨大なエネルギーが爆発した結果にすぎない。米騒動をもたらした人民大衆の巨大な革命的エネルギーを高く評価し、これに驚嘆することはもちろん間違っていない。だが米騒動そのものをもって、ひたすら英雄的革命的なものであったとだけ考へるのは、疑問ではないだろうか。米騒動は、たしかに支配階級を震撼せしめ、その後の労働運動に力強い影響をあたえた。それは大規模な革命的な騒動ではあったけれども、統一ある組織のもとに企てられた革命運動ではなかった。この意味で、片山潜の言葉は、この闘争の意義を簡潔に道破している。すなわち、「米騒動と巨大なストライキの波の経験は、プロレタリアートの自然発生的大衆運動が勝利しえないことを示した。革命的闘争の鍵は組織にある。これこそ日本プロレタ

リアートが、この闘争から学んだ教訓なのだ」と。

本書の批評紹介の域を脱して、筆者は米騒動の革命的意義についての議論に深入りしたかもしれない。ともあれ本書は、著者の学問的良心的態度が、あらゆる頁ににじみ出ており、日本資本主義発達史上における米騒動の意義を究明してあますところがない。とりわけ第二部福島県における米騒動の経済的・社会的背景とその闘争形態は、地方史研究にとって貴重な資料であると考えられる。さきにのべたように、門外漢である筆者が、この学問的香気ゆたかな研究にたいして、蕪雑な批評を試みたことについては、著者の御寛恕にまたねばならない。ただひとつ筆者の読後感ともいふべきものをのべておきたい。ただひとつ筆者の読後感ともいふべきものをのべておきたい。ただひとつ筆者の読後感ともいふべきものをのべておきたい。位置づけるか、この問題がのべられていないことである。もちろん著者の研究は、米騒動を日本資本主義の発展段階との関連においてとらえられている以上、筆者の注文ははずれかもしれない。いやむしろ、労働運動史家こそ、この要求にこたえなければならぬと思われるのであるが……。

(一九五七年二月、未来社刊、三八〇円) (飯田 鼎)